

---

**とある不幸少年の双子の兄で魔神で。**

神の如き強者（アザゼル）

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある不幸少年の双子の兄で魔神で。

### 【Zコード】

Z0243X

### 【作者名】

神の如き<sup>アザゼル</sup>強者

### 【あらすじ】

気が付いたら上条家の長男、不幸少年の双子の兄になつてた・・・  
しかも転生する際におねーさんにヤバいチート特典、“聖なる右”  
“邪なる左”“聖人の肉体”を手に入れて・・・

いや。おねーさん、フィアンスマさんに睨まれるでしょうが。

アレイスターにも目をつけられるだろうがッ！死亡フラグも乱立

だし！！

基本は魔術の原作沿いでいきます。

科学は書くがどうか未定。

## プロローグ（前書き）

熱いパトスが止まらなかつた。

反省も後悔もしない！

## プロローグ

びつも。はじめまして皆さん。

皆さんがもし、テンプレ的なチート転生をしたらどんな反応をしますか？

1・狂喜乱舞する。

2・俺TOTOEEEEEで無双する。

3・原作ブレイクやヒロインをビリ落とすか考える。

・・・え？俺？俺は・・・

4・『惑つてゆきのんのおっぱいを飲む。

だね。

昨日の夜に東方紹介天プレイしてたらいきなり停電でどこからか飛

んできた槍が刺さって意識を失つたらこうなつた。

なんで槍？つて思ったが意外と冷静に死を受け入れられたね。

そしたらほぼ全裸の似非イケメソの狩 に似た奴が現れて「あ、ごめ。殺しちやつたwww」って言われてネギをケツに差した俺は悪くないはずだ。

で、上司らしき女性（美人で巨乳。）に「大事！」にお詫びとして何か願いを叶えてくれることになった。

「藍しゃまをモフモフさせてくださいーーー！」

「却下です 」

「えーー！そんな馬鹿・・・いいやあああああああーーー！」

つてのが最後のやり取り。

チート特典なしで転生は気が重いよおねーさん・・・

で。目を覚ましたらどこかで見たことがある女性に抱かれておつぱいを飲んでたわけだ。

あのおねーさんが何かしたのか頭に変な知識があった。

“ 聖なる右 ”

・・・フィアンマかよーー右方のフィアンマ来ちゃつたよー、  
チート特典あつたよおおおおおおーーー、

・・・ん？待てよ。まだ何か・・・

“邪なる左”

・・・・・・ゑ？何このこかにも魔王が持つてそなな能力？

“邪なる左”？“聖なる右”と何か関係があるの！？

怖い！怖いよおねーさん！どんな能力付けちゃつてくれてんの！？

「あらあら。“刀夜”さん、“翔麻”が頭を抱えていますよ」

「おおおおー！“当麻”は笑つてくれたぞ！」

・・・よし。待とつか。“刀夜”に“当麻”？

まさかこの女性の名前は“詩菜”さん・・・か？

え？まさかまさかの上条家？“聖なる右”的元ネタのとあるに来ちゃつたの？

いやいやいや！ないない！姓名は違うかもしれないぞー！もちつくん  
だ俺よー！望みをすこ・・・

「上条セーーん、一番のお部屋でお願いしますねー」

「あ、はー！」

ダアアアアアアウトオオオオオオーー間違いなく上条家の皆さんでし

詩菜さんは俺、刀夜さんは赤ん坊、おそらくは当麻を抱いて病院の診察室みたいな場所に入った。

「まおは上条さん、」出産お疲れさまでした。えーと、翔麻君が兄、当麻君が弟の双子になりますね」

「（ぬあににいいい！？不幸の代名詞である当麻の双子の兄だとおー？）」

「・・・はい。軽く検査をすれば帰つても構いませんよ」

「ありがとうございます先生！」

の部屋に移つた。

詰葉せんせんも三三麻を抱いて一緒に入ると体重計やメジャーとかで体を調べられた。（ちこ見られて看護婦さんに微笑ましい笑いをされると地味に落ち込んだ。）

お医者さんや看護師さん 乃夜さんや詰葉さん が語っているのを聞き流しながら特典を整理してみた。

“聖なる右”

“邪なる左”

“式神使役”（八雲藍限定）

“ナデポ・ナデホ”（ナデホは撫でるとホシと“めらぐわい”）

“聖人の身体スペック”（才能もほぼマックス。限界はあるがかなり伸びる。）

“黄金律”

・・・どないセーユーねん。

“聖なる右”と“邪なる左”でもあれなのに“聖人の身体スペック”つて何よ？

ナデポとナデホって・・・

だ が！！“式神使役”はマジ感謝！藍しづまをモフモフできる！よっしゃー！これで勝つー！

黄金律もあるから金には困らないはず！

死亡フラグ満載などあるワールドだが生き残つてやる！…

「うふふ、刀夜さん。翔麻がやる氣を出してもすよ」

「おおーなんか炎も見えるー。わあがは母さんの子だなー。」

「あいあい。刀夜さんの子でもありますよ」

・・・まずはこのストロベリーな空間に耐えることから頑張りや。我が弟当麻・・・無邪氣で羨ましきヤ・・・

## プロローグ（後書き）

かみじょーさんの双子の兄でいきます。

翔麻は藍しゃまを愛でるーとになつ。

## 1 (前書き)

次の投稿はたぶん来週の日曜日。

ストックが貯まつたらまたわからんけど。

・・・、」やがてよう。前世の姫は とあるの世界に生まれ落ちて一年が経ち、わたくしは一歳になります。双子の弟の当麻も一歳になり、すくすく育つてあります。

何の悩みもなく、親父と母さんの有り余る愛情を注がれ、今日も生きてこます・・・が。

「あらあら。刀夜さん、ケチャップがついてますよ」

「ねねー。まんなかねー。」

・・・、」のストロベリーな空間をびづかしやがれえ！  
何をするにしてもイチャイチャー食べるときもイチャイチャー、テレビを見るときもイチャイチャイチャイチャしゃがつてええええええー！  
てめーら何歳だ！？俺らを生んでまだ子供作る気が親父イ！  
もつもつてへれ・・・、」の空間、耐えられねーよ・・・

「ははは、」

「ああ・・・、とつま、」ひやんをたすけてくれ・・・

「ここちや、まんまといたいの？」

「 もうすぐしつえがいたいよとつま・・・」

まだ一歳だから舌つ足らずだが、俺も当麻も少しは喋れる。俺はきちんと話せるがあくまでも演技だ。立つて歩けるし、字も汚いながらも書けるが・・・あまり見せるとないとは思うが捨てられるかもしないからな。

体は聖人だし、精神も大人に近かつたから見れば異端児にしか見えんわ・・・

少しずつだが、親父の書斎に潜り込んで本を読み漁つたりしている。聖人の廃スペックな才能のおかげか、苦手だった英語もすらすらと覚えられた。

「じゃあ、今日は翔麻と入りますね？」

「おおーなら当麻と入るのか・・・よかつたら眞で入らないか？」

「（H口親父め・・・）」

「あらあら。そしたら母さん、頑張つちゃうわね」

「（何を！？お母様、それだけはヤメテ！？生殺しなんて生温いから！教育に悪いよお母様アアアアアアアアアアアア！－）」

お母様、詩菜さんがたまに天然発言をするから心臓に悪い。前なんか親父と俺らの前でやろつと（何をとは言わない）するからな・・・天然ほど始末に追えん。

親父をじいじ発言で落ち込ませた隙に母さんと風呂に入ることになった。

残念ながらマイボディは三歳児なので一人では風呂には入れません。でも母さんの若々しい肢体が見れるから役た・・・げふんげふん！まあ、ともかく。死んだ親父を放置して当麻も一緒にに入ることになった。

・・・にしても母さん、本当に【バキュウウウン！】歳か？若すぎね？二十歳と言つても違和感ないぞ？

親父。よく結ばれたなあ、おい。

「にじめやーあたまをあらつたげるー」

「あらりあらり。当麻さんは翔麻さんが好きなのね」

「（・・・母さん、頼むから胸を押し付けて体を洗うのはやめてくれ。俺の心のマグナムが火を吹くから）

「んしょ、んしょ」

ちなみに俺は全裸で全裸の母さんの膝に乗つけられて体を洗われ、当麻は一生懸命頭を洗つてくれた。

・・・なにこのカワイイナマモ生物？将来フラグ建築士となるリア充に不覚にも萌えたぞ？

ショタの扉を開かないように気を付けよう。

母さんはすでにショタコン、といつか俺コンに近い感じになつてゐからな・・・そちらも警戒せねば。

「ここにやることやー！」さじはおれのあたまありつてー。」

「はいはー」

「あらあら。本当に仲がいいわね・・・」

俺は母さんの膝に乗せられたまま前に座る当麻の頭をガシガシと洗う。

母さんは手を頬に当てて聖母の微笑みで俺達を見ていた。

・・・ですがお母様、俺の体をむやみやたらに触るのはやめてくれませんかね？

そう言えば親父はフラグ建築士（免許皆伝）だつたよな？前も散歩に行つたらフラグを建てて母さんに睨まれてたことがあった・・・いや、まさか・・・な。

当麻のフラグ体質つて親父の遺伝じゃないかって思い始めた。

ラノベのううとかでもそれらしいのがあつたし、詩菜さんになんかされてたような・・・

・・・まさか、当麻だけでなく俺にも親父のフラグ建築士体質を受け継がれているのか・・・？

だとしたらNICE BOAT ENDになる可能性が大かツ！！  
ヤンデレ女性に背中を刺される可能性があるのかアアアアアアアア  
！！

嫌だ！親父のフラグ建築士体質嫌すぎる！-！

「じゃあ中に入りましょつか。当麻さん、おいで」

「うんー。」

「（ないない。親父のフラグ建築士体質は当麻だけに受け継がれているはず。俺がそんなの受け継いだら当麻以上に厄介事に巻き込まれるー。）

「あら？ 翔麻さん、ビーハしたのかしら？」

「うん。なんでもないよかあさー」

母さんに返事をすると抱き締められたまま、ブクブクする。母さんの柔らかいおっぱいが心地いいです。乳児の暗黒歴史は嫌だったがまたしゃぶりたいものだ。

・・・この発言・・・俺、変態か？

「じゃあ出ましょつか。のぼせたら大変ですー」

「わかった

「わかったーー！」

風呂から出ながらチート特典について考える。

聖人のスペックは理解はしているが問題は“聖なる右”と“邪なる左”だな。

前に使おうとしたら頭に激痛が走って鼻血だらだら出して母さん達を心配させたし。

どうやら体が完成してないと魔力不足が原因だと仮定できる。使った瞬間に体に宿る魔力が急激に無くなり、それに耐えられなくなつて頭がオーバーヒートしたんだろう。

この一つと“式神使役”以外は大体確認はできた。

聖人のスペックは学習する際に嫌と言つほど身に染みたし、黄金律は散歩の途中に拾つた宝くじが一等だったことがあつたしな。

「・・・親父・・・」

くまさんのプリントされたパジャマを着てリビングに戻ると親父が缶ビール飲みながらテレビを見て黄昏ていた。

その背中には哀愁感がありすぎて不憫になるほど小さくて儚かつた。ついつい子供口調ではなく素で声を出してしまつほどに涙を誘われた。

仕方がないので今日は親父と寝ることにした。

母さん、親父が可哀想だからわかつてくれ。そんな泣きそうな顔されても困るから。

当麻がいるから一人で・・・ね？

俺は渋い顔をして寝る親父に抱き締められながら夢の中に旅立つた。

・・・親父。髭が痛い・・・

くそっ！早く藍ちゃんの尻尾を抱きながら寝たい！――

## 1 (後書き)

口調合ひてるかな？

刀夜は不憫な親父のポジションで詩菜は親バカ＆禁断の親子愛のポジションで。

当麻はしばらく癒しへいきます。

## 2 (前書き)

タグとあいすじを変えました。

詩菜ちゃんはマジショタロンですね。

親父が不憫すぎる・・・当麻もなんかヒドイ。

おはよー。上条 翔麻でござります。  
また親父と寝た日から（口ご意味ではなくて）からに時間が過ぎ、  
当麻共々四歳になりました。

「いぐぞー 翔麻ー！」

「いいよーー！」

現在は親父と母さん、当麻で広々とした自然公園でのんびりヒック  
ニックに来ている。  
最近は当麻が妙にトラブルに巻き込まれるため、気分転換に遊びに  
来たのだ。

俺と親父はゴムボールを使って簡易野球をしている。  
母さんと当麻は少し離れた木の下でピーチシートを敷いておやつ  
を食べながら見ている。

「それー！」

「・・・わゆぴーん」

親父がアンダースローで投げたへロへロのゴムボールを見て目をキ

ラリと光らせた。

手に持つた武器を振りかぶつて・・・!

ゴムボールを打つとポシュッと何かが抜ける音とパーンといつ音と共にゴムボールは吸い込まれるように親父に当たった。

場所は  
・  
・  
・  
股間。

ゴムボールとはいえ、発展途上の聖人の筋力で打つたからとんでもないスピードで親父の股間に当たつただろう。

てこちらに向かってきた。

「な、ナイスバツティングだ翔麻・・・ガクツ・・・」

「・・・すまん親父。手加減を間違えたわ」

「あいあい」

俺は憐れんだ目を親父に向け（原因コイツ）、当麻は親父を完全に眼中なしではしゃが、母さんはいつものように手を頬に当てるのほほんとしていた。

たまたま来ていた別のファミリーの親父さんが憐れんだ目で見ていたのは余談である。

氣絶した親父の足を掴んで引き摺りながら母さん達のところに戻ると当麻がはしゃぎながら親父を踏んでいた。

・・・自分の子に引き摺られる、踏まれる親つて惨めだね。

「あいあい。翔麻さん、顔に泥がついてますよ。いつに来なさいな」

「つまあー？」

親父をビニールシートの上に乗せると当麻は馬乗りになつてビーンどーん言いながら親父の腹にダメージを与えていく。それを内心、笑いを噛み殺して見ていると母さんに引つ張られ、膝に乗せられた。

母さんは飯が入っていたバスケットからハンカチを取り出すと顔を拭いてくれた。

・・・でもね、お母様。俺は18+4歳なんですからちーんはしませんつて。

はい、ちーん。って言われてもやんないからね？母さん、頼むから

ハンカチを鼻の中に入れないでくれ。息ができない。

「ぶべつ・・・か、母さん！息が！息ができないからー。」

「あらあら」

母さんはほほんと笑いながらハンカチをどけるとナデナデと頭を撫でてきた。

駄目だ・・・我が母上ながら行動パターンが読めん。  
恐るべき天然お母様！！

「ビーんー・ビーんー！」

「・・・いやいや、当麻。やめたげなさい。親父が死にかけてるから

「し、翔麻・・・母さん・・・助け・・・ぐげぶつー！」

「あらあら。刀夜さん、楽しそうですね」

「なんでー？母さん、なんでやつなるのー？」

ついつい素でまたツッコミをした。

母さんの行動パターンと言動パターンがピッタリ的中する確率つて  
天文学的確率じゃね？宝くじ一等を当てる方が楽な気がする・・・  
まあ、俺は黄金律で一等をフイーバーするけどね！おかげで上条家

の口座が一気に一桁上がったけどね！

・・・さて。いい加減に当麻を止めよう。親父、死ぬかもしれんしな。

右手に触れないように（・・・・・・・・）当麻を抱えて引き剥がすと母さんの隣に座らせた。

この頃から当麻の代名詞と呼べる『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が右手に宿っている。

生まれた頃から『幻想殺し（イマジンブレイカー）』があるせいか、当麻はかなり不幸なトラブルに巻き込まれているのだ。

本作でも『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の詳細はよくわからず、一次小説でもよく転生者が使うが・・・当麻のはヤバい。

「にいちゃん？」

「フランクフルトやるから黙ろつな」

「わーい！」

当麻の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』はオリジナル、“あらゆる異能を打ち消す”右手なので神様の奇跡も神様の祝福も消すのだ。  
だからSHIKIは最低レベルなのだ。

俺の聖人としての、“聖なる右”の、“邪なる左”の魔力を打ち消すもんだから修行用に掛けている魔術をも消すもんだからせつかく掛けた魔力負荷枷も消されるのだ。

作るのにも苦労するからなあ・・・当麻には悪いが右手にだけは触れらんねえ・・・

「にいちゃん、フランクフルトまだあるよ」

「ん。 いたぐわ」

「あらあら・・・ケチャップもいるかしら? マヨネーズやカラシ、わさびも・・・」

「なぜわさび! ? 母さん、なんでわさびが選択肢に出るの! ?」

母さんがバスケットからケチャップとマヨネーズ、カラシにわさびの容器物を出してきた。  
・・・もう母さんがわからない・・・

げんなりしながらケチャップとマスターードをフランクフルトにかけて食べてるとき、親父が腹と股間を押さえながら起き上がつてきた。冷や汗ダラダラ流して起き上がる親父を見ると親父の鑑を思い知つた。

親父は子に父の威厳を見せるときは輝くんだな・・・よく理解したわ。

「どうか父さん大丈夫? やつとてなんだが痛いだろ」

「・・・ふつ・・・翔麻、覚えておきなさい・・・」

親父はいまだに腹と股間を押さえながら少しだけ体を起こす。  
それから泣き声で俺と当麻を見て・・・

「それが・・・父親なんだよー。」

「キシヨイ」

「おとうさん、 きもちわるー」

俺と当麻のタブルパンチで親父は今度こそ完全にノックアウトした。  
ずずーんと落ち込んだ親父はブツブツと延々に咳きながらこの世の  
終わりみたいな顔していた。

取り敢えず俺と当麻と母さんは無視しておやつ用の母さん特製クッキーを食べることにした。

・・・は？親父？完全放置しますがなにか？キノコ量産します  
がなにか？

うむ。気分転換にはなつたから良しとしよう。  
母さんに頬擦りされながらクッキーを頬張ることに集中する俺だつ  
た・・・

## 2 (後書き)

幻想殺し（イマジンブレイカー）ってなんでしょうね？詳しく知ってる方はいるのでしょうか・・・

次回は時間が飛ぶかもです。

### 3 (前書き)

・・・なぜ、いつなつた・・・?

「・・・翔麻、なんだそれは？」

「拾つた」

「・・・いやいや。兄貴、それはないと思ひぜ？」

現在、我らが上条家は全員がリビングに集まってテーブルに乗る黄色の物体をガン見している。

親父股間破壊事件から時が過ぎて当麻と俺は六歳になつた。

時が飛んだのは特に話すことがないからだ。

あつたとすれば当麻が妙に大人びたことだらうか。こんな濃ゆいキヤラしかいない上条家の環境のせいだから仕方ないかな？

後、俺は親父を“父さん”から“親父”と呼ぶことにした。

親父はかなりショックを受けて鬼気迫る表情で掴み掛かれたんだが・・・まあ、親父の仕事仲間を出してなんとか事なきを得たがな。

「あらあら。可愛い狐さんね」

「」ーん・・・

「というか兄貴、狐なんかよく見つけたな・・・相変わらず運がいいから羨ましいよ・・・」

「散歩してたらなついた。山の中でうわづらしてたから・・・かな？」

「なんで曖昧？」

まあ、わかるやつもいるが・・・この狐、藍しやまだ。

魔力負荷の枷を掛け続けていたら魔力がかなり上がりつてやつと“式神使役”が可能になつたわけだ。

ちなみにだが今の俺の魔力は普通の魔術師の十人分はある。だがまだまだ上がるだらうな・・・“聖なる右”と“邪なる左”に加えて俺、聖人だし。

さらには当麻は前よりもトラブルに巻き込まれやすくなつた。交通事故になりかけるのは、デフォになつてる上に当麻にピンポイントでファミレスの料理がぶちまけられたり・・・当麻、碌な目に遭わんな。

それと同じくらい親父とフラグを建てまくつてる。

当麻はお人好しだから人助けをよくする。それできゅん・・・つてくる乙女たちが多数多数。

「飼つていいく？」

「「ん！？」（翔麻様！？私はペット扱いですか！？）」

黙れ。妖怪でなおかつ美女だから～とか言つたら親父が混乱するだろうが。

当麻も変態クソ兄貴・・・とか言い出すだらうがよ。言われたら殴

るナビね。

ああ・・・みなに藍ちゃんとの出来事はいたんな感じ。

回想・・・一時間前

「うつし。六年の魔力負荷でかなり魔力量は増えた・・・藍しやまを召還じやあああああああい！！」

学校の帰りに近くの山にて俺は叫んでいた。

今まで意識が覚醒してから自分の中の魔力を操って負荷を掛け続けて六年！ついに藍しやまを召還する魔力に達したのだ！！

藍しやまを召還するには魔術師四人分の魔力、現界させるには六人分の魔力が必要なため、やつとやつとやつとやつとやつとそれが出来たのだ！

まだ発展途上たが普通の魔術師か子供の時より百倍以上の魔力があるため、操るのにも時間がかかったため、一年ズレたのだが・・・まあ、いいや。

「藍しやまあああああああああーーカマアアアアアアアアンーー」

ペ力

詠唱もへつたくれもないような叫びをすると田の前に陰陽師が使い  
そうな文字が現れ、円を描いた。  
それに魔力が吸われる気配がするとジジジ・・・と嫌な感じがして  
きた。

・・・あれ？失敗か？

するどボフン！と音がして中から「んな声が・・・・・

「サーヴァントキャスター、呼び掛けに応じて参上した・・・と「  
ネタはいいから。どんだけノリがいいんだ？」あ、あれ？紫様はこ  
うすればウケると・・・？」

グダグダだった。なんか運命ネタで藍しゃまが現れると思った顔  
をしながらリトルボディの俺を見下ろした。

藍しゃま・・・スキマババアに騙されてるよそれ・・・ん？紫様に  
言われた（・・・・・・）？

「あーあー、聞いていい？」

「あ、はい。翔麻様」

「・・・取り敢えずヤバそうな呼び方は後で聞くとして・・・紫様  
に言われた？」

「ええ。紫様が貴方を世話するようこと・・・あー紫様からお手紙  
を預かっています。どうぞ」

・・・なんでだろう。手紙を開くだけなのにガタガタと震えが止ま  
らない上に冷や汗がダラダラ出てくるんだが・・・  
藍しゃまもなんか？を頭に浮かべて固まる俺を見てるし。  
ええい！見てやるよー！

ペラツ・・・

はじめまして・・・かしら?

知つてるかもしないけど八雲 紫、幻想郷の賢者と呼ばれるスキマ妖怪よ。

今日はよくも私の藍を式神として使役してくれたわね・・・アザゼルの頼みだから聞いたけど許さないわ。  
しばし、藍を式神として貸してあげるけど覚悟しなさい。近々、そちらに行つて貴方を殺して（・・・）藍を取り返し、奴隸にしてあげるわ・・・  
うふふ・・・束の間の天国を楽しみみなさい・・・?

八雲 紫

・・・ウソオオオオオオオオオオオオン！？紫様に狙われてるの俺！？  
しかもおねーさんの名前つてアザゼルつて言つんだ！あの有名な“  
神の如き強者”のアザゼル様ですか！？

「あ、あの翔麻様？なぜそんなに汗を流しておられるのですか・・・  
？」

「オワタ。俺オワタ。死んだ。欲望に身を任せるとこうなるのか・・・  
・アハハハ・・・」

「え？ちょっと翔麻様！？どうしたのですか！？」

藍しゃま・・・いや、藍が声を掛けてきたが俺は事態を理解すると  
目の前が真っ暗になつた。

「え、ええ！？翔麻様ア！？なんで白田剥いて倒れるのですか！ち  
よつとーちよつとおおおおおおおー！」

そして時はまた戻る・・・

「・・・俺、死んだよね？」

「いきなりなに言い出すんだ兄貴！？」

「こーん！（だ、大丈夫ですよ！紫様もさすがには・・・ねえ？）」

不思議な顔で睨む。・・・しかし、どうして藍ちゃんがなんて言  
えねーよ。

藍さんを召還した後に氣絶した俺を藍さんが看病してくれて目を覚ましたら藍さんが狐形態（尻尾は一本）になり、上条家に連れ帰つたわけだ。

て玄関にいた当麻は見られて家が会話を始めた。おれはな

正直もう人生オフタと思ひ、チート妖怪のスキマバハアに目を一  
けられたんじや死んだも当然だろ。

「むう・・・仕方がない！翔麻、きちんと世話をするなら飼つてい  
いぞ！」

「・・・うん。ありがとう親父」

「 ベーーん ( もうペシトですか・・・少し、嫌ですね ) 」

「・・・翔麻。もつパパとは呼んでは「言つてねーし。親父、キモいぞ」・・・なぜだ・・・どこで育て方を間違えたんだ・・・?」

親父、最初からだよ。事ある」とに抱きついたり髪を擦り付けたら嫌われるからね?

当麻なんかフラグを建てまくる親父をかなり軽蔑してるからな?

もつ上条家の順位は決まつてるな・・・

母さん（詩菜）「俺=当麻」  
「親父

みたいになつてるわ。

親父、低いのはあなたのフラグ建築士体質のせいです。むやみやたらに女性に声を掛けなつてしまつう。（通信簿風に）

「ヒーリングで翔麻さん？名前は決めてるのかしら？」

「ん？藍つて名前を付けるけど・・・どうかした？」

「あらあら。残念ね・・・母さん、『ハーハ』って名前を付けようとしたんだけど・・・」

いや。母さん、ネ「じやないんだからた。ほり。藍さんもなんか嫌そうな顔してゐるし。

残念そうにする母さん、ブツブツ項垂れる親父、リビングに置いて  
あつた鞄を持って一階に上がった当麻。

それらを見てから藍さんを優しく抱き上げて自分の部屋に入った。ランドセルを床に投げて藍さんをベッドの上に乗せると社長椅子（親父のオトモダチから戴きました。感謝感謝。）に座つて頭を抱える。

「どうすりやいいんだ・・・スキマババアは完全に俺を目の敵にしてやがるし・・・」

「スキマ・・・ババア・・・紫様が怒り狂いますね・・・翔麻様、取り敢えず私は何を?」

「んん？ああ・・・別に何もしなくてもいいですよ。したらスキマ  
ババアに殺られますから・・・はあ・・・」

ため息をつくと藍さんがあつたが、おもむろに止めたが今  
の俺には気がかない。

おそらくはとあるワールドのフィアンマ死亡フラグよりもやばい死  
亡フラグを建ててしまつたのだから。

その後、藍ちゃんと話しあって呼び捨てにすることにした。

やがて出発の準備と一いつ緒しよに藍の医屋を出でやがせり。た。

人間形態だから日本の戻暦をモノモノ…すくは寝てしまふ俺だった。

「うう・・・つい勢いでやられてしまったが・・・翔麻様は上手す  
きて・・・不味いな・・・」

寝ていた俺は藍が股を濡らして悶えていたことを知らなかつた・・・  
そして幻想郷の賢者共々、貞操を狙われることすらも・・・

### 3 (後書き)

なぜかスキマババア登場。

もう思いっきりハ雲一同出します。翔麻、喰われます。

紫に藍に橙を出すか・・・

#### 4 (前書き)

ふざけすぎたwww

プロフィールは原作、高校入学時に書きます。

早く出したいよちえええええ  
ん!!

「（翔麻様、何をしておられるのですか？）」

「んー、まあ、能力の確認・・・かな？」

俺こと上条 翔麻が藍と出会って（拾つて？）はたまた時間が過ぎた。

藍を召還した影響か、魔力がかなり増大していた。

藍を召還する前を1とすると20くらいまで上がっていた。

能力の確認には“聖なる右”“邪なる左”“聖人”的スペックと弱点について調べることにした。

まずは“聖なる右”。魔力が増えたおかげか、具現化しても魔力負荷による肉体損傷は無くなっていた。

しかし、原作のフィアンマと同様に空中分解が起きやすく、使えたものじやなかつた・・・が。

何かが可笑しいのにも気が付いた。

「安定しないと言つよりも何かが足りないような・・・？」

なんかこう・・・電池が足りなくなつた懐中電灯みたいに薄くなる感じがあるんだが・・・聖なる右つてこんなんだっけ？

フィアンマさんは世界に散らばるあらゆる魔術に関わる禁書レベル

の代物を集め、ミーシャ・クロイツェフの天使、インテックスの十万三千冊の禁書、当麻の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』を使って神上になり、聖なる右が安定してるんだよな？原作じゃすぐに当麻にぶん殴られたけど。

「ああ・・・消えちまつた・・・」

「翔麻様、おそらく魔力か何かが足りないのでは？」

「・・・え？」

魔力が足りないのもあるけどもうひとつ重要な因子<sup>ファクター</sup>があつたわ。

『天使の力』<sup>テレヅマ</sup>

たぶんこれが無いから聖なる右が安定しないんじゃねえのか？  
・・・どちらにせよ、天使にはなりたかねえわ。人間、やめるつもりはないし。

聖なる右、邪なる左、聖人の力を持つ時点で人外です。

「翔麻様、貴方が聖人ならば『聖痕』<sup>ステイグマ</sup>があるのでは？紫様は見たことある。とおっしゃっていましたが・・・」

「『聖痕』<sup>ステイグマ</sup>、ねえ・・・」

・・・嫌なこと思い出した。聖人と言えば対聖人最終兵器、“聖人殺し”があつたな・・・

あのグラマーなおねーちゃんとは関わらないようにしよう。うん。

取り敢えず聖なる右は理解できたから次に行こうか。

卷之三

「・・・そうですね。私も少し寒気が・・・」

次は邪なる左を調べるんだが・・・なんか早く出せ出せ出せ出せと

ガタガタ震える左肩というか左腕を抑えながら魔力を練り始める。

・・・あれ？これ、あれじやね？

「やめろ！これ以上したら俺の邪眼が目覚める！」

ふと気が付いた。どうやら田舎めでたそ。

的な厨二のお決まりのじやね?

・・・イタイ。イタすぎる。俺って厨二病が発症したのか?

「ちよ、翔麻様！？なぜ頭を地面に・・・・ああ！血が！血が出てますよお止めください！」

なんかムズ痒くなつて藍と来ていた裏山の地面に頭をガンガン叩きつけてゴロゴロと地面を転がりまくつた。

藍は止める」と必死に羽交い締めするか  
やめて。  
大きなお腹が当たるので

落ち着いたら藍の陰陽道の術で止血してもらひて包帯を巻かれた。藍はもうやめてくださいよ?とめつ!って俺の額を指で押した。

・・・なんか、萌えた。

## ピシヤン

雷が俺にピンポイントに命中した。

雷に打たれて痺れながら叫ぶ俺を見て藍が叫んだ。

予想しなかつた。というか出来なかつた。だつてそうだろ？邪なる左を発動させたら雷に打たれるつて吉 でもないぜ？

最近出た辻林都子は受ける。

にえああああああああああああ・・・・・つてあれ?どこかでこんな感じの  
変身っぽいのを見た気が・・・?  
雷に打たれる俺はウンウン唸りながら記憶を引っ張り出して検索を  
している。

え？雷？慣れたけど？というか落ちたときだけで今は帯電してるようなもんだけど？

「し、し、し、翔麻様…それ…！」

ん？

藍がプルプル震えている手の指で俺の顔の左を指していた。つられて顔を左に向けるように振り返り・・・固まつた。

そこには腕。聖なる右のようなく空中分解しながらも腕が左肩から生えていた。

……では……！

「 紫様が赤ん坊に見えるぞ・・・？」

「どうかなんでネロ！？そこは右腕だろ！？『悪魔の右腕』デビルブリンガーじゃねえんかいアザゼルうううううううううう！？」

見た目はあれ。デビメイの黒猫さんの悪魔の右腕みたいなの。真っ黒で聖なる右の龍のような腕とはまた違つまちに悪魔の腕とも言えるモノが左肩から生えている。

・・・めっちゃ寒気がする。スキマババアの手紙を読んだ後よりも  
すげー寒氣がするよ・・・

「・・・ん？」

## 「翔麻様？」

「いや・・・なんだこれは？」

邪なる左

ディアブロ・イクシオ・アザゼリア

現在、使用不可。

能力

- ・絶対領域（50?限定）
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???
- ・???

・・・なんやねんこれ・・・使えねーし。

絶対領域はいわばその範囲だけはあらゆる攻撃を防げたりできるみたいだな・・・

有効範囲は50?、クズにもほどがあるな。

「・・・使えねー」

「し、翔麻様?なぜため息を?」

「いや・・・邪なる左って約立たずみたい。だつてさあ・・・使える能力はひとつしかないし、範囲も狭すぎるし・・・」

「・・・あー紫様から指示があつたのを忘れていました!」

「え？」

藍は裾に手を入れて「ゴソゴソ」と動かすと中から丸められた羊皮紙が出てきた。

それを藍から受け取ると中を開いて読んでみる。

「これを読んだるといつ」とは“邪なる左”を調べているでしょう。

それはまだ不完全ですが、世界に散らばる靈装を探し出し、それを“邪なる左”<sup>ディアブロ・イクシオ・アザゼリア</sup>で触れなさい。そうすれば空白の能力が解放されるわ。あ、あと絶対領域は0・5秒しか使えないから気を付けてね？ 絶対領域は強化される度に進化するから。頑張ってね

“神の如き<sup>アザゼル</sup>強者”

追伸

あ、ちなみに“邪なる左”<sup>ディアブロ・イクシオ・アザゼリア</sup>は私の力の一部よ

・・・マジですかいな・・・

「一枚目か・・・」<sup>回収する靈装が・・・なになに?</sup>

「どれどれ？」

- ・法の書  
・使徒十字  
・ブリューナクの種  
・カーテナ"オリジナル

「・・・なめてんのかあのクソ神様・・・」

「あ、あはは・・・」

なんなのこれ？全部つていうか、ほんとあるワールドの重要な靈装じやねえか・・・

カーテナ＝オリジナルなんかどないせえ話つねん。あの女王にどう

王女様と戦えってか？

「ブリューナクつて…… 閻魔刀なんかネロさんやん」

「あ、閻魔刀なら紫様が持つていましたよ？外の世界を散歩したら見つけたわ」とか言つてました」

頭を抱えて絶叫した。

あのチート妖怪のスキマババアからどうやってもうえって言つんだ？

「閻魔刀ください」

「却下よ 死になさい」

「アッ

「！」

つてなるわ！

「あ、まだあるみたいですよ・・・靈装なら取り込めば強化されるからね だそうですよ？」

「キタ！これなら集めて進化すればあるいは・・・マジでキタ！これで勝つる！」

「無理ですよ？紫様はオリジナルのアザゼル様と互角に渡り合いますから

「神は死んだッ！！」

こんな感じで藍と裏山にでもらったチート特典を確認した。

取り敢えず全てが未完成であり、発展途上だということがわかった。

藍からの提案でさらなるパワーアップのために藍による魔力負荷、肉体重力負荷などの枷を作つてもらつた。

見た目は耳飾りみたいな感じで蒼色の石がついたものである。

まあ・・・母さんに聞かれたが、ほっぷにちゅーで許してもらつた。親父が射殺すような目で見てたのは痛かつたが。

「・・・ZZZ・・・」

「あ、ああ・・・ダメ・・・！イク・・・！」

その日の夜、また藍の尻尾をモフモフしながら寝た。  
次の日の朝にピクピクした藍を見て不思議に思ったのは余談である。

#### 4 (後書き)

ルビは適當 www

書いてたらゆかりんのフラグがどんどん建つな・・・コワイ。

閻魔刀とかは完全にノリ。邪なる左の見た目から決めた。

## 5 (前書き)

なぜいつなつた? としか言えない。

「やーいやーい疫病神ー！」

「お前がいたらみんな不幸になるつて父ちゃん言つてたぜー。」

とある校庭では一人の少年が虐められていた。

ただ、不幸に・・・トラブルに巻き込まれるからといって、

虐めている一人が水が入ったバケツを少年に掛けよつとする・・・

「ぶるああああああああああーー！」

「げー！やべ、魔神だ！逃げ・・・ぎゅぱりおーー？」

そこにバケツを持った少年が消えると一人の少年が現れる。  
といふか俺。

「てめえええええらああああああー！俺の弟を虐めやがつてええええ  
ええーー！」

俺は虐めていたクソガキを殴り飛ばしたり、蹴り飛ばしたり、タマ  
を潰したり・・・とにかく暴れてトラウマを埋めつけた。  
何回も何回も当麻を虐めやがつて・・・当麻がてめえらに何かした

のかー？

「（小学校）に来てからしばらく経つと当麻はいつもの“ごくへ、トラブルに巻き込まれ、近付くとトラブルに巻き込まれると心無い親が言いやがったからイジメなんて生温い仕打ちを受けている。甘かった・・・！当麻が昔に虐められていたのは描かれていたがまさかここまで酷いとはな・・・！」

「うわ ん！痛いよ ！」

「黙れ！・・・当麻はもっと痛いんだ馬鹿野郎があ！反省しやがれ！」

「上条！貴様何をしていろ！？」

教師が来るまで俺はそいつらを殴りまくっていたのだった。  
教師が全力で抑えても聖人である俺には障害にはならず、生徒に注意しない教師、一緒になつてイジメをする教師も殴つた。

これが最近の日常。俺は当麻をただ不幸だからという理由で虐めるクズを相手に暴れています。

「くつ・・・上条、貴様・・・」

「チツ、イジメを解決しないような奴は教師を名乗る資格はねえ・・・  
・教育委員会に報告をさせてもうつぐ。証拠ならあるからなあ・・・」

「

倒れる教師を傍田にボロボロの当麻の血を拭いてやると放り投げられたランセルを当麻の分も持つて背負い、睨みながらその場を去った。

まあ、藍に頼んでクソガキのイジメの現場、影ながら当麻を殴る教師が映った映像を撮つてもらつた。

「・・・翔麻・・・」めん・・・

「当麻、お前は悪くない。ただ運が悪いだけ（・・・）・・・俺だけでもお前の味方だよ。親父も母さんもな」

「「」めんね・・・

「謝るな」

静かに泣く当麻を背負いながら歩いていると家に着いた。

残念ながら両手が塞がつてるのでドアは足で器用に開けた。

「ただいま」

「あらあら翔麻さん、当麻さん・・・あらあらー大変ねー」

「うげ」

小さい声でただいまを言つと出掛けたのはすの母さんがリビングか

ら玄関まで来ていた。

あ、やべ・・・今まで心配せないよつじたの・・・

母さんは当麻をペタペタと触りまくつて心配していた。  
いや、母さん・・・当麻が痛そつだからやめたげて。

「母さん、この事は親父も知つてゐるから。俺は当麻を手渡すの  
が聞こえてくれない?」

「・・・あらあら・・・刀夜さんも知つてゐるのね・・・?」

「(翔麻、父さん死ぬんじやね?)」

「(墓には親父の好きな酒を置いてやるわ)」

「(死ぬ前提じやねえか!)」

ブラックオーラを纏つた母さんを見なかつたことにして当麻を俺の部  
屋に入れた。

ランセルをポイと投げるとクローゼットから救急箱を取り出す。

「と、当麻ー?またやられたのかー?」

「藍、すまないが手伝ってくれ

「すじません。藍さん・・・」

そこに外出していた藍が窓から帰ってきた。

ちなみに当麻には藍が玉藻前だということはバレている。

前に藍が幻術を掛け俺と散歩に行く際に当麻の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』のせいか、幻術が効かないため、藍がバレたわけ。

「……当麻のやつ、藍の胸見て顔そらしていな。<sup>ウフ</sup>初心よのぉ……  
フォフォフォ！」

「……うん。よし……今日は風呂には浸かるな。体を軽く拭く  
だけにしろ……滲みて痛いぞ？」

「ああ。ありがとう翔麻……」

「気に入んな」

当麻も双子だから「う」ということで俺を呼び捨てにさせている。  
んー、前世に家が診療所だったから包帯の巻き方とか手当ハンドが慣れてるんだが……いいか。

「……翔麻、まさか今の……」

「……さあ、ゲームだゲーム」

「現実逃避するなー！」

終わってペシと頭を叩くと下から絶叫が響いた・・・うん。聞いてないよ？母さん！？僕が何を・・・むしゃああああああーーってのは聞いてないぞ？

「聞こてるじゃねえか！」

「なじ止めるへ・母さんが修羅モードだから殺されはしないが死ねるぞ？」

「・・・何やるへ・王 ハン？」

当麻も逃げたようだ。

まあ、母さんが修羅モードになるのは上条家最強最悪の化け物を田観めさせると同じだからな・・・親父には生け贋になつてもらおう。

親父の叫びを無視して藍に膝に乗せられながらゲームをすることにした。

「・・・とか翔麻？なんで藍ちゃんの膝に乗つてるわけ？」

「よく見る。乗せられてる（・・・・・）んだよバカ」

「おお・・・やはり人間の子供はスベスベで柔らかい・・・

「（・・・・・関わらないよ）。わかったか？（当麻／翔麻）？」

「

藍がなんかヤバイ気配を放つが無視してゲームを楽しむことにした。俺は藍に膝に乗せられてクンカクンカ匂いを嗅がれながら頬擦りされてる。

・・・確定だ。俺も親父の魔性の魅力（フラグ体质）持ってるな・・・認めたくなかつた。

あ。聖なる右も発動できるくらいに『天使の力』も貯まつてきた。  
といふか聖人だからがむやみやたらに貯まるんだよな・・・俺はア  
ツクア以上にバケモンか。

少しづつ体も鍛えている。藍は長い間を生きているおかげか、あら  
ゆる技術を持つてゐるから色々教えてもらつてゐる。

弾幕、太極拳、テコンドー、JOCなどなど。弾幕は余計だよ。特にJOCはいいね。蛇男さん直伝らしいから使いやすい。

」

力チャ力チャとコントローラーを鳴らしながら当麻とバトル。地味に操作する相手に蹴りを加えたり目隠ししたりとフェアもクソ

もなかつた。

藍は俺を抱きながら鼻歌歌つてるし。

「喰らひえやー禁断のハメ技コンボオオオオオオーーー！」

「ぐあつーーーそれは卑怯だぞ翔麻アー！」

コントローラーが壊れるべりべり連打すると俺のキャラが打ち上げ  
空中サマーソルト 空中コンボ 踵落とし 必殺技で踏み殺す。  
我ながらひさしがたな・・・

「うしゃああああー今日のHビフライゲットだべ

ーーー

「くわつーー翔麻反則すぎだらーー！」

・・・ううう。翔麻も気は紛れたから良し。かな?

取り敢えず翔麻のHビフライ、つかつたです。

+-+-+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「・・・行こうか

「はい翔麻様」

その日の夜、俺と藍は家から抜け出しへとある場所に向かう。  
藍が撮った証拠の映像を教育委員会に届けるために。

「・・・ククツ、悪いね。当麻をあそこまでして許せないんでな

「翔麻様・・・」

「ん? 終わったか?」

「はい。マスク元にも渡しましたから握り潰すのは無理ですね。帰りましょう」

「はいよ

ただムカつくから殴ったというクソ教師を半殺しにすると何事もなかつたかのように家に帰った。

最近になってわかつたんだがどうやら俺は壊れてるみたいだな。人を傷付けても罪悪感も何もないからな・・・

「・・・せめて・・・当麻だけは光の道を歩ませたいな・・・」

「翔麻様？」

「・・・いや、なんでもないよ」

その日からか。俺が当麻とは違う闇の道を歩み始めたのは・・・もう、当麻とは相容れない存在になりつつあるな・・・

## 5 (後書き)

あ、翔麻は別に敵になりませんよ？

ただ単に邪なる左の強化フラグです。

事態は急展開！！

「げほっげほっ・・・チツ、油断したな・・・

「翔麻！翔麻！」

「翔麻様！しつかりしてください翔麻様！」

俺は血の流れる腹を押さえながらコンクリートの地面に横たわっている。

痛みに血を吐きながら流れる血を必死で押さえる藍と泣きながら揺さぶる当麻を震む視界で他人事のように眺めていた。藍は今まで見たことがないくらい真っ青になりながら白い布を真っ赤に染めながら押させていた。

「・・・がふっ・・・

「・・? 翔麻様！」

口に貯まつた血を吐き出すと薄れしていく意識を必死に留める。痛みを堪えながら魔力を操つて傷口を塞ごうとするが、背中を少し治すだけが限界だった。

「・・・くそ・・・目が震む・・・」

「翔麻！翔麻ア！」

「くつ！まだ救急車は来ないのか！」

「・・・当麻・・・藍・・・母さん・・・親父・・・すまん・・・」

急激に薄れていく意識を留められずにそのまま闇に沈んでいった。  
藍と当麻が必死に呼び掛ける声が嫌に遠くに感じた

+

-

-

-

+

-

-

+

-

-

+

-

-

+

-

-

+

-

-

+

-

-

+

「・・・翔麻・・・なんで・・・！」

とある病院にて上条 翔麻は包帯で巻かれたまま、死んだように眠り、側には彼の家族である刀夜、詩菜、当麻が横たわる翔麻を呆然と見ており、当麻は泣きながら詩菜にしがみついていた。刀夜はなぜこうなったかと怒りに震え、詩菜は泣く当麻を慰めながら抱き締めていた。

「上条君の命に別状はありません。傷は残りますが後遺症らしいものはないはずです」

「先生・・・翔麻はなぜ・・・？」

「・・・左脇腹と背中にナイフの刺し傷がありました。正直、もう少し深かつたら・・・」

「・・・そう、ですか・・・」

「今は絶対安静です。麻酔もありますし、目覚めるのは早くて四日でしょう」

そう言つと医者らしき青年は部屋から出ていった。  
静かになつた病室にて心電図の音だけが響く。

「翔麻、翔麻・・・俺が・・・俺が不幸なのが悪かつたんだ・・・」

「当麻・・・一体何があつたんだ?」

「・・・」

ポツリポツリと当麻は泣きながらも静かに語り出した。

「今日の飯は何かね？当麻、なんだと思ひ？」

「んー、俺は餃子かな？少しズラしたら鍋か何かじやないか？」

「私はいなり寿司ですね」

「・・・藍、さすがにないわ」

「なつーいなり寿司がないとは、私に死ねとー？翔麻様、酷い！」

俺達は学校の帰りに迎えに来てくれた藍さんと翔麻と一緒に通学路を逆に歩いていたんだ。

「でもまあ・・・また買つてあげるかい」

「・・・」

うわあ・・・藍さんの田がキラキラ光ってるな。藍さん、いなり寿司とかきつねうどんが好きだからな・・・あ。また翔麻が金拾つて・・・諭吉さんか！

「・・・ネコババするか（ボソッ」

駄目だ！翔麻、頼むからお巡りさんんとこに届けて！それにお前、金に困つてないだろ！前に拾つた宝くじで一等当たの知つてるんだぞ！？

「当麻、口止め料だ」

「ふつふつふ・・・お主も悪よのぉ・・・」

「いえいえ。お代官様ほどでは・・・つてやめろ。小学生がガキこんなことしてたらヤバイだろ」

「それに翔麻様がやると悪人にしか見えませんしね」

「よし。藍、飯抜き。いなり寿司はお預けだ」

ピシャーン！と藍さんの後ろに稻妻が見えると涙田になつて翔麻の顔を豊満な胸に埋めさせながらなぜー？と言つたげな田を翔麻に向けた。

いや、藍さん・・・翔麻窒息しかけてるからやめたげ・・・

「もがががが  
！」

翔麻様！いなり寿司を！いなり寿司をくださいいいい！！

・・・よし見てないぜ？翔麻の手が藍さんの胸にズブズブ食い込むのは・・・

耳に聞えず、田をやらじて歩いておいた

30分くらいすると翔麻が折れて藍さんにいなり寿司を一週間分買  
う」とで手を打つたみたいだ。

「いくらだつけ？」

「 れる? 前に調べたら 1536879 の田でしたよ? 」

「どんだけあるんだよ！？翔麻、お前の金運分けてくださいー。」

「やだ」

合っていた。

精通がうとか奉仕をうとか言つていたがなんなんだ?

しばらく歩いて人気の無い場所に来ると翔麻の顔が険しくなつて藍さんに何か指示を出していた。

藍さんが隣に来ると前を向いたまま、静かだがはつきりと聞こえる声で言つてきた。

「当麻、少し警戒するんだ。嫌な予感がする」

「え？ 藍さん・・・？」

「藍ーー！」

翔麻が叫ぶと何処からかナイフを持った人達が現れ、俺達の邪魔をしていた。

翔麻はそれを見た瞬間に駆け出し、近くの中年男性を蹴り飛ばした。

「当麻を連れていけーーこーは俺がやるーー」

「死ねええええーー疫病神がーー！」

「邪魔だこのクズがーー！」

俺に向かつて走ってきた青年を腹パンすると翔麻は藍さんにちょいちょいと指で家の方向を指してまた別の男性を殴つた。  
え？ なんだよこれ・・・？

1

「うるせえ！自分の失敗を当麻のせいにすんな！！」

——翔麻！翔麻！——

一 当麻！早く逃げろ！藍、早く！！

翔麻はわらわらと沸き出る男性達を蹴り飛ばしたり、腕の骨をへし折つたりと暴れていた。  
叫ぶ翔麻と憎悪の籠つた顔でナイフを振るう男性を見ていると怖くなってきた。

「ウオラアアアアアアアアツ！」

翔麻は縦横無尽に飛び回りながら次々と男性を地に伏せていくと藍さんが俺の前に立ち塞がつて守るようにした。

せられた。

ひ ひ い

ブツブツとナイフを持つた中年男性が近付くと無性に怖くなつて逃げようとしたが足が動かなかつた。

翔麻がそれを見て叫ひながら「ちらに想」でくるのが見えた

ドシコツ・・・

「え・・・？」

「いってえ・・・！」

気が付いたら俺は翔麻に抱き付かれていた。

翔麻は辛そうに顔を歪めるがすぐに戻して背中に手を回すとズボツと何かが抜けた音がした。

カラントランとコンクリートの地面に落ちたのは血の付いたナイフだった。

「翔麻 · · · ？」

「邪魔くせえんだよクソジジイがあ！！」

「けひひひ・・・・げぼつ！？」

翔麻が背を向けるとそこが赤く染まつた場所があり、血がダラダラと流れていた。

「お前も・・・死んでしまええええええーーーー。」

グサツ・・・

背中を押されてフラフラしていた翔麻を青年がナイフで腹を刺した

のが見え、飛び散った血が翔麻の目に入つたのも見えた。

叫ぶ翔麻を見て俺は近寄ろうとしたが遠くからサイレンが響き、ナ  
イフを持った男性達は我先にと逃げ出した。

藍さんは今まで見たことがない顔で翔麻に近寄ると着く前に翔麻はコンクリートの地面に崩れ落ちた。

コンクリートの地面に崩れ落ちた。

血がコンクリートを汚してゐるのを見ると藍さんの顔が真っ青になり、札を出したが止まり、代わりに白いハンカチを出して腹の傷を押さえた。

「翔麻様！翔麻様！」

「翔麻！翔麻ア！」

「早く！誰か救急車呼べよ！ヤバイぞあれー。」

「・・・そうか・・・」

当麻が話し終わると刀夜はプルプルと握り拳を震わせながら怒っていた。

詩菜はまた泣き出した当麻をあやしながら自分も泣くように一人で抱き合っていた。

「・・・失礼、します・・・」

「む？貴女は？」

そこに藍が人間形態で入ってきた。

刀夜は訝しげに藍を見るが当麻が説明をすると刀夜と詩菜は目を見開いて驚いた。

「貴女が・・・あの藍・・・？」

「はい。今まで隠して申し訳ございません。翔麻様に止められていましたから」

藍は全てを話した。自分が翔麻の式であること、翔麻を助けられなかつたことと・・・全てを。

全てを話した藍を刀夜と詩菜は頭を下げる感謝をした。守れなかつたわけではないと、今まで翔麻を支えてくれてありがとうと。

そこに翔麻に繋がれた心電図が煩く鳴ると医者や看護士さん達が慌ただしく入ってきた。

刀夜、詩菜、当麻、藍は病室を追い出され、慌ただしく動く医者達を呆然と見ていた。

「翔麻・・・！死なないでくれ・・・！」

「翔麻さん・・・」

「翔麻・・・翔麻・・・翔麻！兄ちゃんあああああああん！――」

当麻の叫びは暗くなつた病院に不気味なほど響き渡つた。



6 (後書き)

翔麻、死す・・・なわけありません。

スキマババア出すのにちょうどよかつたから書いた。

原作でもナイフで刺された（包丁か？）場所ありましたし。

ゆかりん、暴走。

藍しやまも WWW

「好きです。結婚して私と一緒に暮らしませんか？」

「・・・また返答に困るコメントだなあ、おい。藍、ほんまに本物  
か『ゴイシ?』」

「や、やあ?」

・・・ん?状況がわからない?なら少し時間を戻そつか・・・  
逆 キングクリム (ry

「・・・ん?」

目を覚ましたら知らない・・・言わねば！

「知らないでん。」「翔麻！？起きたのかー？」「最後まで言わせりよー！」

「母ちゃん！ 母ちゃん！ 翔麻が田を開けたぞ！」

「あらあら！ 翔麻さん！」

「ぐげるぶあ！？」

呟き言葉を言おうとしたら親父に阻まれ、親父は叫びながら母さんを呼ぶ。

その母さんはあらあらと連発しながらガン見をする。翔麻は泣きながら傷をダイレクトに頭突きしてきた。

・・・なんてカオス？

閑話休題。

「・・・どうだい？ 翔麻くん、体の調子は？」

「はい。腹が減つてると少し体が動かしづらい以外は特にはないからだね。ほかにはないか

い？」

「・・・あの、これは・・・？」

しばらくすると親父が呼んだのか、爽やかイケメンの医者が入つて

きて俺を問診しながら色々書いていた。

気になつたのは右目。包帯が巻かれているのか、真つ暗で何も見えなかつた。

ちょいちょいと指でつづくとイケメン医者は苦笑しながら鏡を見せてきた。

「・・・え？俺、右目も怪我したのか？」

「いや。君がお腹を刺された時に血が目に入つただろう？消毒をして包帯を巻いているだけ。この包帯よりは取れるのは早いよ」

緑色の病人服を少しづらすと真っ白な包帯が体を完全に覆つていた。マジでか。そんなに俺は重症だったのか？

「まずは背中だけどこれは比較的に傷は小さかつた、傷は消えるよ

「つてことは腹の傷はヤバイってこと？」

「・・・君、本当に小学生？筋肉の付き方と言い、医学会を唖然とさせると・・・」

「よく、言われますから」

「・・・ま、まあね。お腹の傷は背中と比べてかなり大きい。残念だけどこれは一生残るだろ？ね」

・・・背中にしか魔力回せなかつたから仕方ないかな?  
腹くらいなら服とかで隠せるからいいか。

それから軽く話をするといケメン医者からコン「」やメロンなどをたかつ・・・げふんげふん・貰つて食べることにした。

「こやーー本当に良かつたよ翔麻ーー父さんはお前が心配で心配で・・・」

「あー、すまん親父。心配かけたな」

病人用のベッドに上半身だけを起こして母さんが剥いてくれたリンゴをシャリシャリ食べながら泣く親父と話す。  
母さんは「」ながらリンゴを・・・どんだけ剥くん母さん?」

当麻は少し陰のある顔で俺と話してたから「」ピーンして氣にするなと言つておいた。

案の定、当麻は大泣きして抱きついてきた。「めぐと延々と謝りながら。

「あ、そつだ翔麻」

「なんだよ親父?」

「藍やんなんだがな、ゆかり?さんを連れてくると言つてこたぞ?」

ガツシャ ンー!

「・・・ぬ?」

「いやーーあんな美人さんにそこまでされると羨ましい・・・いや、違つよ母さん!これは・・・!」

「あらあら。刀夜さんつたら・・・」

母さんが親父を掴んで病室から出ていったが、俺はそれどころではなかつた。

紫が・・・来る・・・?

「し、翔麻!/?なんでガタガタ震えてるんだ!/?」

「\$\* @¥\$ #£¤!-!-」

「え? 翔麻! ちよー看護士さ

んー!」

閑話休題 (TAKE・2とも書く)。

嘘だ！藍のやつ、スキマババアを呼ぶのか！？  
マズイ！非常にマズイ！今の俺は手負いだ！こんななんじゃ戦ひビリ  
ろかスキマババアの式にされて奴隸化するのが見え見えだ！—

ビうするー！？考えろ上条 翔麻！

「うううむ・・・ZZZ・・・」

取り敢えず思考を放棄して寝ることにした。  
あれこれと考えて寝ていたらあつとこいつ間に口が過ぎ、夜になつ  
ていた。

そして・・・奴が来る・・・！

「・・・せwww氣が付いたら夜とかwww

翔麻は深夜の妙なテンションになり、ハイになつていいだけです。  
出来たらトンカチを投げていただけると嬉しいです。

「し、よ、う、ま、せ、まアアアアアアアアー！—」

「がふれー！？」

悶々と深夜になつた病室のベッドで腕を組みながらウトウトしていると衝撃が腹を突き抜ける！

痛みに堪えながら下を見ると見慣れた帽子と金髪が目に入った。

「ら、らん・・・？」

「翔麻様翔麻様翔麻様翔麻様アア～～～～！～！」

グリグリと腹の傷に頬擦りしていたのは藍だった。

いつものキャラはどこに行つたのか、抱きついてスリスリしてくる藍に俺は戦慄を感じた。

キヨロキヨロと藍を引き剥がしながら辺りを見回してソレを探す。そして視線を感じる場所と「藍に似た氣配がある場所を見ると冷や汗がダラッダラ噴き出すのを感じた。

「（・・・やべえ・・・！）のフレッシャー・・・ただ者では・・・出たか！スキマババア！～」

「紫さま～」の方が翔麻様です～」

グバアツと空間に裂け目が出来ると体がピシリと固まり、動けなくなつた。

「アーリー」アーリーはアーリーのアーリーだ。

「ひい！？」

中からおぞましいほど怨念が籠つた声が聞こえてくると妙にぐうと

走馬灯か

ああ・・・俺、死ぬんだ・・・出来たら死ぬ前に藍の胸に埋もれて  
寝たかつた・・・  
童貞も卒業したかつた・・・親父、エロ本ありがとう・・・

「さあ！貴方の残りの人生、天国だつたかしら！？よくも私の藍を  
玩んでくれたわね！覺悟はできてるかしら・・・？」

「・・・オワタわ」

出来的た裂け目から南蛮服のような服を着た女性が出てきた。女性は閉じられた扇子を持って出でると目が笑っていない顔で俺を見ると・・・固まる。

• • • • • • • ?

「・・・いい」

「・・・は？」

そのまま固まつた女性がボソリと何かを呟くとしがみついている藍を無理矢理引き剥がしてそそぐと病室の隅に行つた。

「（ら、藍ーなにあの子ー？あの子が貴方のなのー？）」

「（は、はい。の方が上条 翔麻様、私のもう一人の主ですが・・・紫さま？）」

「（そ、そう・・・まさか私をここまでときめかせるなんて・・・！何年、いや！初めてだわ！）」

「（ゆ、紫さま？どうしました？）」

・・・何を話してるんだ？藍が紫さまと言つてるからあれがスキマババ・・・さーせん。八雲 紫か・・・

感じた殺気に訂正してジーッと何かを話す一人を見てみる。

・・・なにあれ？あれが幻想郷の賢者つて呼ばれる大妖怪八雲 紫か？

藍から何かを聞くと頬を染めて涎を垂らしそうなくらい口を緩めたり、目を見開いて驚いたりしていた。

「（や、それ本当？藍、そんなにいいの？）」

「（は、はい・・・正直、私とあらひものが股を濡らして・・・／＼）」

・・・ヤヴァイ雰囲気がするな。アダルトなガールズトークしてやがる・・・

藍が股を擦り合わせながらもじもじする姿を見て頭に貞操危険！つて出るん・・・ん？紫がこちりに・・・まさか！俺を殺る氣か！？

「好きです、結婚して私と一緒に暮らしませんか？」

そして時はまた戻る！

「……え？ そんなに時間が経っていたのかー？」

「はい。刀夜様も詩菜様も当麻も心配してましたよ？ 刀夜様なんかは……はい。私はナニモシリマゼンヨ？」

「……藍、知つてしまつたのか。親父の裏の顔を……親父、海外によく行つてフラグを建築しまくるからとんでもない繋がりがあるんだよね。」

ハリウッドスターしかり、マフィアしかり、大会社の社長しかり……・親父エ・・・

「んー、だからか。体が動かしづらいわけだ。親父も話せばいいのにさ・・・あむつ」

「あやーー可愛いーほらほらー翔麻、これも食べなさいー。」

「……俺のイメージが、崩れる……」

「あ、あははは・・・紫さま・・・」

藍によれば俺が刺されて一ヶ月が経つてるらしい。藍が紫に会いに行くのに三日、幻想郷で冬眠していた紫を起こすのに約一ヶ月、起これてイライラした紫を止めるのにも時間がかかってやつとのこされ連れてきたら俺は起きてたど。

・・・藍、お疲れ様。いなり寿司いくらでも買つてやるから。

藍からそりて詳細を聞くと俺達を襲つた奴等は会社にリストラされた奴ばかりみたいだつた。中には俺が教育委員会に提出したあれのせいでクビになつた教師もいたらしい。

あんなにいたのにバレなかつたのは近くに住む住民が見て見ぬフリをしたからだそうだ。

不幸だつた当麻を疎ましく思つてたらしご・・・が、イラつくな。

「警察に逮捕されたのですが、見て見ぬフリをした住民達の立件は難しいそうです。本当に知らぬフリをしたのか、本当に知らなかつたのか曖昧でしたから」

「・・・うわ・・・親父、キレるぞ」

「というかキレてますね。刀夜様は・・・いや、違いますね

・・・怖い。自分の親父なのに得体の知れない奴だよ！

親父なら本気出せば世界すら動かせるんじゃねえのか！？

「「・・・ありえる（ありえそつですね）」」

「し、翔麻！あーんしてあーん！」

「・・・いや、お腹一杯だから・・・」

本当に八雲 紫なのか？さつきからお土産つて幻想郷名物の幽々子饅頭（かなり人気らしい）をあーんしたりしてくるんだが・・・ほら。藍もなんか紫・・・たま・・・？バカな・・・！って言つてるよ^\_~

「・・・やはりあの攻撃はまずかつたか・・・」

「え？なんかしたの？」

「あ、いや。紫さまを止めるために幻想郷の幽々子、レミリア、フランドール、咲夜、靈夢、魔理沙、勇義、萃香達にも力を借りたんですけど・・・」

「なにその豪華な幻想郷オールスター！？」

・・・（頭にそれを浮かべる・・・）

・・・うん。なんか紫が泣きながら逃げる姿が・・・いや。高笑いしながら幽々子さん達を追いかける姿がまわまわと浮かぶな。

とこりかゆつかりんとか天魔とかは戦わなかつたのだらうか？

「不眠不休で繫れまを止めるのに一ヶ月以上……うふふ……大変でしたねえ……」

「う、藍ー？ どうしたんだ藍ー。しつかりしろー自分を忘れるなー。」

虚ろな目をしてブツブツ言い始めた藍を見てガクガクと肩を掴んで揺らしながら藍に呼び掛けるが、藍はあはははと壊れたようだ。  
藍ー？ どうすれば……はつ！ ？

翔麻様、もし私が可笑しくなつたらほつぺにひゅーをお願いしますね？

・・・いや、やるのは母さんだけだからね？ そんなに田をキラキラさせてもやらないからね？ というかワキワキした手を引っ込めろー！

・・・どうしようか。なんか頭にこの余話がよぎつたんだが・・・

あはははと虚ろな田をした藍、次はどれを食べさせよう？ とスキマを調べる紫と田が覚めた時よりかなりカオスな空間になつていた。

追伸・藍にほっぺにちゅーしたらハイになつて終始ウザかった。  
勢い余つて喰われかけました。まる。

## 7 (後書き)

次回から学園都市フラグ建設開始。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0243x/>

---

とある不幸少年の双子の兄で魔神で。

2011年10月10日08時53分発行